ART KISS LETTER

ムーミン展

CAMK熊本市現代美術館

会期 2020 11.14（土）→ 2021 1.11（月・祝）

開館時間：10:00〜20:00（展覧会入場は19:30まで）　休館日：火曜日 年末年始（12/31、1/1）

＊ただし12/29は開館

Moomin
The art
AND
The story

© Moomin Characters™

vol.96
WINTER
アートキッスレター

MOOMIN SPECIAL ESSAY

〈特別寄稿〉ムーミン谷はなぜ居心地が良いのか

Contemporary Art Museum, Kumamoto

「ムーミン展 THE ART AND THE STORY」が開幕しました。展覧会を観終わって、
もっとムーミンについて知りたくなった！という方もいるのではないでしょうか？
本号の AKL では、講談社で長年、編集担当としてムーミンに関わられた横川浩子さんを監修にお迎えし、
ムーミンと作者トーベ・ヤンソンについてもう一歩アプローチ。
また、ムーミンの物語が私たちに教えてくれることについて、特別寄稿をいただきました。

特別寄稿

ムーミン谷はなぜ居心地が良いのか

横川浩子

1

物を持ちすぎないスナフキン

「なんでも自分のものにして、持って帰ろうとすると、むずかしくなっちゃうんだよ。ぼくは見るだけにしてるんだ。そして立ち去るときには、頭の中へしまっておく。ぼくはそれで、かばんを持ち歩くよりも、ずっとたのしいね。」※1

崖下の宝物を取り損ねて悔やむスニフを、スナフキンがたしなめたときの言葉です。
元祖・シンプルな暮らし実践者とも言えそうなスナフキンは、いつも同じ古ぼけたコートに緑色の帽子。新しいものを勧められても「新しすぎるから」という理由で断ります。でも帽子には野の花を飾り、時には拾った鳥の羽根を挿す。あとは旅のお供のテントとリュック、お気に入りのハーモニカ、そしてムーミントロールとの友情さえあれば充分なのです。
別の作品では、こうも言っています。

「大切なのは、自分のしたいことがなにかを、わかってるってことだよ」※2

現代の私たちへの鋭い提言とも取れそうな場面がさり気なく散りばめられているムーミンの物語。お話の中で易しく語られるために子どもが感情移入しやすく、大人にも響いてきます。そんな作品と作者トーベの魅力、フィンランドという国の背景についてご紹介しましょう。

占有ではなく共有するムーミン谷

若き日のムーミンパパが家をたてるのに良さそうな場所をみつけたとき、通りかかったハリネズミに尋ねます。

「この美しい場所は、だれのものなのですか？」
「だれのものでもないわ。みんなのものよ」※3

北欧各国に古くからある「自然享受権」という慣習法をご存じでしょうか？他人の土地への立ち入りや自然環境の享受を、地域住民にだけではなく旅行者などすべての人に対して認める権利だそうです。通行権、滞在権（スナフキンのようにテントをはっても OK）、果実採取権などが含まれ、実際に私もフィンランドの森で完熟のベリーを摘ませてもらいました。
但し、自然を破壊することと、所有者を煩わせることは NG です。ベリーを摘みすぎてはいけないし、大騒ぎやゴミの放置などはもってのほか。禁止事項を看板に託さず、自分で考えて主体的に行動する自律性を尊重する思想は、フィンランドの教育にも通じます。
国連が発表する世界幸福度指数の上位国に毎年ランクインするフィンランド。幸福度指数は、国民が自らの実感としての幸福感をもとに数値化したものですが、この国でムーミンが生まれたのは必然と言えそうです。他者との比較ではなく自分の中の幸せという価値基準は、先のスナフキンの言葉とも重なります。

ムーミンやしきはオープンな場

ムーミンやしきは、鍵をかけることがありません。訪れる人はいつでも誰でも歓迎され、出ていきたくなれば、その自由も保障されます。受け入れられて一緒に過ごせる安心感と共に、時には独りにもなれる居心地の良さが、物語全体を象徴しているとも言えるでしょう。
今、日本では多くの子どもたちが閉塞感に苛まれてはいないでしょうか。他人のことが気になって仕方がない。友達グループに入るか抜けるかは大きな問題。ムーミン谷の暮らしを知って、風通しの良い人間関係や居場所を子どもたち自身が見つけてくれるといいなと思います。
怯えすぎて姿が見えなくなったニンニも、ある日ムーミンやしきにやってきた少女。ムーミン一家は優しく接しますが、ミイだけは少し違います。

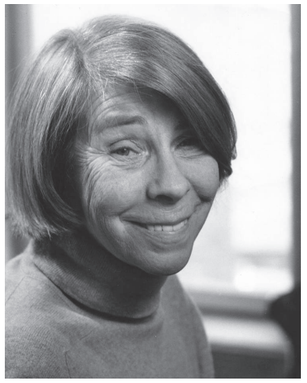
「たたかうってことをおぼえないかぎり、あんたは自分の顔を持てるわけないわ」※4

ここだけ読むとシビアな言葉に思えますが、ミイはニンニと一緒に遊び、話せるようになってきたことを喜んでいる前段があります。やがてニンニは大切なある人のために激怒した瞬間、顔を取り戻します。自己肯定や個人の尊重といったある意味難しいテーマが、すっと胸に落ちてくる短編です。

すべての登場人物に居場所がある

トーベは作品で答えを全て提示してしまわず、子どもたちが自分で考えられる余地を随所に仕掛けています。物語の底力と、子どもたちが真実を捉える力、その両方を信じていたのでしょう。
作品中には声の小さい存在や異端的なキャラクターを多く登場させ、必ず彼らにも居場所を作りました。恐ろしいモランでさえ最後にはムーミンと浜辺で心を通い合わせるのです。トーベがフィンランドで言語的少数派だったことや、学校で全体行動に馴染めなかった子ども時代の体験なども影響しているのかもしれませんが、通底しているのは寛容の精神ではないでしょうか。
美しい描線で表現された「原画」と共にムーミンたちの「物語」を通して、皆さんがトーベからのさまざまなメッセージをご自分なりに見出してくださることを願っています。

引用はすべて トーベ・ヤンソン著
「ムーミン全集［新版］」講談社、2020 年。
※1　下村隆一訳『ムーミン谷の彗星』
※2　下村隆一訳『ムーミン谷の夏まつり』
※3　小野寺百合子訳『ムーミンパパの思い出』
※4　山室静訳「目に見えない子」『ムーミン谷の仲間たち』



1914年ヘルシンキ生まれ、2001年同地にて没。フィンランドを代表するアーティストで、その活躍はムーミン小説、絵本にとどまらず、きわめて多彩であったことが知られています。

トーベ・ヤンソンという人

ムーミンの作者はどんな人？という方のために、7つのトピックでトーベ・ヤンソンについてご紹介します。

1 スウェーデン語

ムーミンの物語は、スウェーデン語で書かれフィンランドで出版されたのがはじまりです。それは、トーベの母語がスウェーデン語だったから。フィンランドでは、人口の約94％がフィンランド語を、残りの約6％はスウェーデン語を話します。スウェーデン語系フィンランド人の父と、スウェーデン人の母のもとに生まれたトーベは、この少数派であるスウェーデン語系フィンランド人に属していました。

2 画家としての意識

幼いころから絵描きに憧れていたトーベ。父は彫刻家、母は切手や本のデザインを手掛けるグラフィックアーティストという芸術一家に生まれ、「歩くより先に絵をかいていた」と伝えられるほど、芸術が身近にありました。美術学校で学び、欧州諸都市で研鑽し、戦時中でも個展を開いてそのキャリアを積みます。フレスコ画や装飾壁画の注文を受けることもありました。ムーミンの仕事で有名になってからも、画家としてのアイデンティティを強く持ち続け、多忙の中でも、絵画を制作する時間の確保に努めたと言われています。

3 挿絵、イラスト

トーベのゆるぎない才能の一つが挿絵です。挿絵の仕事をしていた母から多くを学び、14歳にして挿絵が出版物に掲載されるという早熟さ。政治風刺雑誌『GARM』（展覧会第 2 章）は、若き頃のトーベの代表的な仕事です。ムーミンで有名になって以降も、J.R.R. トールキンの『ホビットの冒険』やL. キャロルの『不思議の国のアリス』がスウェーデンで翻訳出版される際に、その挿絵を担当しています。

4 物語と挿絵をどちらも自分で

ムーミン小説は、物語と挿絵の両方が、同じ作者の手によります。どちらも手掛ける例は少なく、絵本以外では大変に珍しいことです。なおトーベは、ムーミン以外にも多数の小説を執筆しています。子供向けだけでなく、自伝や大人向けの作品も執筆し、フィンランドを代表する小説家の一人でもあるのです。

5 漫画（コミックス）

ストーリーと絵の両方を手掛けられるというトーベの才能は、漫画というジャンルでも活かされます。漫画はトーベの卓越した線描と、風刺雑誌で培ったユーモアのセンスが発揮された仕事でした。また主な漫画の仕事は新聞連載だったため、トーベに安定した収入をもたらし、ムーミンの名を世界に知らしめるきっかけとなった点でも重要なものでした。

6 ムーミン誕生の背景

ムーミンの物語は第二次世界大戦下に生まれました。トーベは戦争中、不安感や悲惨さ、絵画制作の行き詰まりから逃れようと、「むかしむかし、あるところに」ではじまる物語を書いたと言います。風刺雑誌にサイン代わりに登場させていた、鼻の大きい小さな生きものを「ムーミントロール」と名付け、主人公に。個人的な現実逃避のために書いていた物語でしたが、子ども向けの本としての可能性を友人に見出され、1945年、ムーミンの第 1 作目が出版されたのでした。

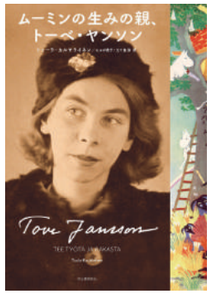
2

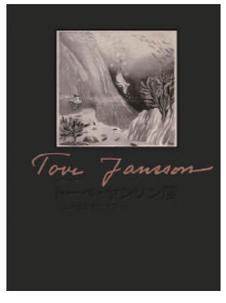
7 パートナーは女性

トーベは男性との恋愛を数度経験しましたが、同性である女性との恋愛関係もありました。ムーミン小説に出てくる「ビフスラン」は、トーベと一時恋仲にあったヴィヴィカ・バンドレル、また「トゥーティッキ」は、生涯のパートナーとなった、トゥーリッキ・ピエティラがモデルです。フィンランドでは、1970年代まで同性愛は犯罪扱いもされていましたが、トーベ自身はあえて隠そうとはしませんでした。パートナー同伴の公式な場にもトゥーリッキを連れ、2 度の訪日も一緒に果たしています。

（岩崎美千子 / 熊本市現代美術館）

トーベ生誕 100 年の 2014 年、2 つの評伝が邦訳出版されました。また展覧会も開催され、カタログが出ています。
左から　・ボエル・ウェスティン著、畑中麻紀、森下圭子訳『トーベ・ヤンソン　仕事、愛、ムーミン』講談社、2014 年。
・トゥーラ・カルヤライネン著、セルボ貴子、五十嵐淳訳『ムーミンの生みの親、トーベ・ヤンソン』河出書房新社、2014 年。
・『生誕 100 周年　トーベ・ヤンソン展～ムーミンと生きる～』朝日新聞社、2014 年。





1. トーベ・ヤンソン 《スナフキン　スケッチ》 制作年不詳　インク・紙　ムーミンキャラクターズ社　2. トーベ・ヤンソン 《「小さなトロールと大きな洪水」挿絵》 1945 年　インク、鉛筆・紙　ムーミン美術館

© Moomin Characters™

ムーミンの広がりと媒体（メディア）

「ねぇムーミン、こっちむいて」という有名な主題歌とともに、1969年、日本でムーミンのアニメが放送を開始しました。それより 5 年前、北欧の児童文学として日本でムーミンの物語が紹介され、すでに書籍で親しんでいた子どもたちもいましたが、テレビアニメが最初のムーミンとの出会いであったという日本人はかなり多いようです。
ムーミンの最初の小説がフィンランドで出版されて 75 年、長きにわたって世界中で愛されるムーミンの受容は、読書体験に限らないという興味深い側面をもっています。ムーミンは国や時代によって、小説、絵本、漫画、アニメと、様々な形と媒体で浸透していったという背景があるのです。
今でこそフィンランドの国民的キャラクターとなったムーミンですが、当初はトーベの母語であるスウェーデン語で書かれたこともあり、国内ではそれほどには有名になりませんでした。転機はイギリスで起こります1950年に『たのしいムーミン一家』が英訳され、人気が出たことをきっかけに、トーベに、ロンドンの日刊紙『イブニング・ニューズ』への漫画連載依頼が舞い込みます。
1954年からスタートした連載は大反響を呼び、他国の新聞にまで掲載されることとなりました。スウェーデン、デンマーク、そしてフィンランドも続き、これを機に母国でムーミンが認知を得たのです。イブニング・ニューズのムーミン漫画は、1960年以降は弟ラルスの仕事となりますが、トータルで21年という、きわめて長期に及ぶ連載となりました。ムーミンの普及は欧州では意外にも、毎日発行される新聞という媒体で、またその受け手は、読者である大人だったのです。次第に児童文学の受容へと広がり、ムーミンは大人から子供まで享受されていったのでした。
冒頭でも触れたように、日本ではテレビアニメが強力でした。アニメによる体験は小説を読むそれとは大きく異なるものです。小説のモノクローム世界に対して、アニメは「カラー」で「動く」。声や歌もまた、イメージ形成に働きかけます。なにより字の読めない幼い子でも楽しむことができるため、受容層がより厚いという特徴を備えています。1990年代に入ってからは、トーベとラルスも監修にかかわり、フィンランド人プロデューサーと日本人スタッフの共同で、原作に近しいアニメが作られました。
この作品は日本以外でも放映され、アニメによるムーミンの認知は世界中に広がっていきますが、それよりも20年も前にアニメで受容したという日本の現象は特筆すべきことでしょう。
本展では第5章「本の世界を飛び出したムーミン」で、ムーミンの多彩な展開をご紹介していますが、これは同時に受容の豊かさを示してもいるのです。2019年、ムーミンのテーマパークが日本にオープンし、最新作の CG アニメも放映がはじまりました。またひとつ、新しいムーミン受容がはじまろうとしています。

（岩崎美千子 / 熊本市現代美術館）

MOVIE

『ムーミン谷の彗星』1992年（発売元：オンリー・ハーツ）

ムーミンコミックス展　COMIC

ムーミンコミックスにフォーカスした展覧会が、ただいま滋賀県の佐川美術館で開催中（～2021年 1 月 11 日）。トーベが描いたキャラクター設定のドローイングやスケッチ、ラルスが手がけた作品の貴重な原画などが紹介されています。2021年以降、九州エリア（福岡県立美術館、長崎県美術館）へも巡回予定。

2020 NOV ＼ 2021 JAN　MUSEUM INFORMATION

EXHIBITION

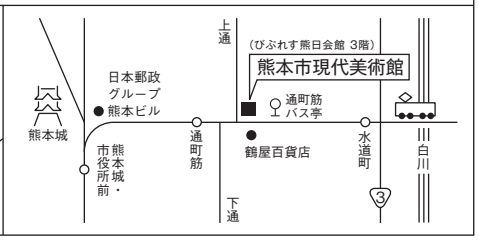
ギャラリーIII　　G3-Vol.137

2020.11.1㊐ － 2021.1.17㊐

熊本市現代美術館所蔵作品より
被災作品 公開コンディションチェック展
〔第4回〕

当館では現在も、2016年の熊本地震による収蔵作品への被害の有無の確認を進めています。本展は、学芸員によるそれらの作品のコンディションチェック作業を一般来館者に公開で行うことで、市民の皆様に美術館の舞台裏業務をご紹介するものです。公開での作業は、11月1日と12月6日に展示室にて実施します。（上記の作業日以外は、通常の収蔵作品展示となります。）

［来館者の皆さまへのお願い］　新型コロナウイルスの感染拡大を防止し、美術館を安全にご利用いただくため、ご来館の際には手指消毒・咳エチケットの徹底をお願いいたします。また発熱・咳・くしゃみ等の風邪の症状がある方は、ご来館をお控えください。皆さまのご協力をお願いいたします。



ART KISS LETTER　アートキッスレター　Vol. 96（2020年11月）［次号は2021年2月発行予定］
編集：佐々木玄太郎　岩崎美千子　坂本顕子　デザイン：石井克昌（MOTOSHIKI）　印刷：シモダ印刷
発行：熊本市現代美術館　〒860-0845 熊本市中央区上通町 2-3　Tel 096-278-7500　Fax 096-359-7892